



①

むかしむかし、ある泉州の漁師が、大阪城のちかくの町を見に行くことにしました。漁師は、初めて見るにぎやかな町にわくわくしながら歩いていました。とれぐれに歩いたのか、わからなくなるくらい夢中で歩いていると、急にだれかに見られているような気がして、はっと立ち止まりました。まわりを見ても、たくさんの人が歩いてるだけで、それらしい人はいません。

「気のせいかな。」

と思って、また歩き始めましたが、やっぱり、だれかに見られているような気がしました。もう一度、まわりを見回しましたが、それらしい人はいません。



②

そのとき、漁師は、一つのお店を見つけました。そのお店から、だれかが自分をじっと見ているような気がします。漁師は、何かに引っぱられるようにそのお店に入りました。お店には、お皿や仏像など、いろいろな物が並べられていました。

「誰が見ているのだろう。」

と思って、お店の中を見回しましたが、だれもいません。でも、やっぱりだれかに見られているような気がしてなりませんでした。

『岸の姫松』 ～貝塚に伝わる民話～



③

漁師は、たなの上に木でできた天女の像が一つおいてあることに気づきました。それは、とても美しく、上品な天女の像でした。その天女の像が、漁師のことをじっと見つめています。

「なんと美しい像だろう。」

次の瞬間、漁師はその天女の像がどうしてもほしくなり、大金を出して買ってしまいました。

④

その夜、漁師が宿で寝ていると、耳元で何かが聞こえてきました。目を覚まし、部屋を見回しました。すると枕元の天女の像が

「帰りたい、帰りたい。」

と泣いているではありませんか。漁師はびっくりして怖くなり部屋からにげようとした。しかし、不思議な力でにげることができません。何度も何度もにげようとしたが、にげることができず、そのうちつかれはてて眠ってしまいました。

眠っていると、天女が夢に現れて、「私は、あなたと同じ泉州の者です。私は、泉州の浜辺にある松の木の子霊です。その松の木の枝でほられた天女の像となった後、わけあってこんなに遠くに来てしまいました。私をその松のある故郷へ連れて帰ってください。」

と、泣きながらお願いしました。



⑤

次の日、漁師は泉州に帰り、天女が言っていた松を探して、あちこち歩き回りました。そして、やっとのことその松を見つけました。それは、泉州の貝塚にある松の木でした。漁師は、天女の像を松の根元に大切に埋めてあげました。

それから、この松の木は「岸の姫松」と呼ばれ、漁師さんたちの安全を見守る大切な松となったそうです。

北小学校の中庭で切り株となった今も、北小学校の校歌の歌詞として子どもたちに歌い継がれています。